

深川木場の歴史と文化 ⑥

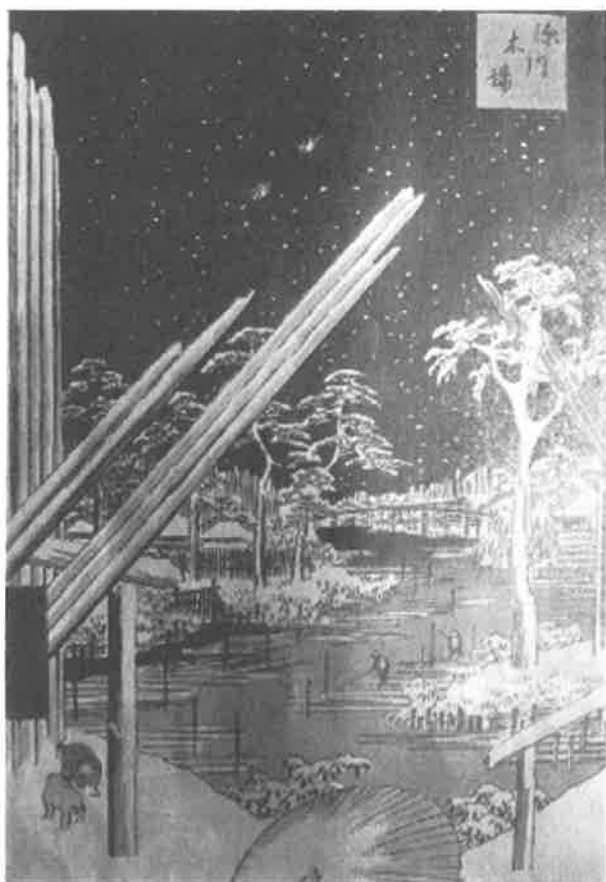
『木場名所図絵』～木場の生活を描く～

江東区深川江戸資料館

木場の記録

歌川広重の浮世絵をはじめ、木場を題材に描いた作品は少なくありません。縦横にめぐらされた掘割、それらを満たす水、木の香り、そこで働く川並や木挽きの粋な姿など木場独特の風情や文化が人々の心をひき付けたのではないのでしょうか。

その代表格とも言えるのが、江戸時代であれば広重の浮世絵「名所江戸百景／深川木場」になるでしょう。



「名所江戸百景／深川木場」歌川広重

雪景色を描いた「冬」の部の佳作の一枚です。材木がところ狭しと置かれた様子を描いた本図は、斜めの線と縦の線を組み合わせることでメリハリのある構図となっています。中央の折れ曲がった掘割には、濃い藍ぼかしを入れることで、流れの屈曲する感じと奥行きを表現し、ことのほか美しく仕上がっています。そのぼかしの部分は、何も彫られていない平面の版木の上に、絵具をのせ、写し取る“あてなしぼかし”という大変熟練を要する技法が使われています。仕事場という絵の題材とするには特殊な風景も、広重は芸術作

品として表現することに成功しています。また近代になると、井上安治や石井柏亭などによる版画などが描かれました。

ここでは、同じく木場を描いた『木場名所図絵』という作品についてご紹介したいと思います。これは木場に住み、或いは働いていた人々が、趣味的に描いたものであると思われ、所謂芸術作品とは異なります。木場の日常の姿をそこに生活する人々の眼差しで描いた記録であり、私たちが木場のかつての歴史や生活を知ろうとすると、こうした絵画資料は思わぬ発見をもたらしてくれ、貴重な歴史資料でもあります。

『木場名所図絵』

『木場名所図絵』は「昭和丁卯仲夏」、昭和2年(1927)夏の刊行ですが、はしがきには編纂者の名前や編纂の意図が記されています。それによれば、木場の古老・中谷鍊次郎氏の指導のもと長島吾助、加藤平次郎、武市昇太郎氏が編纂に当たっており、絵画は森田寛治郎氏が記憶をもとに描いています。そしてその主な目的は、時代の流れで変わりゆく木場の面影を記録し残しておくことにあったようです。

全体の構成は、絵のページと文章(解説・俳句)のページが交互になっており、それらが48組あります。装丁は、表紙を含み全てが蛇腹状に連なる折本という形態です。絵は木版刷りにより彩色されています。解説文は絵の説明にとどまらず、口碑や書物をもとに明治維新前後の様子を記録しようとしています。昭和初年の時点で、古い時代を知っている古老の方々の記憶を掘り起こしたりしながらまとめられた書物ということになります。

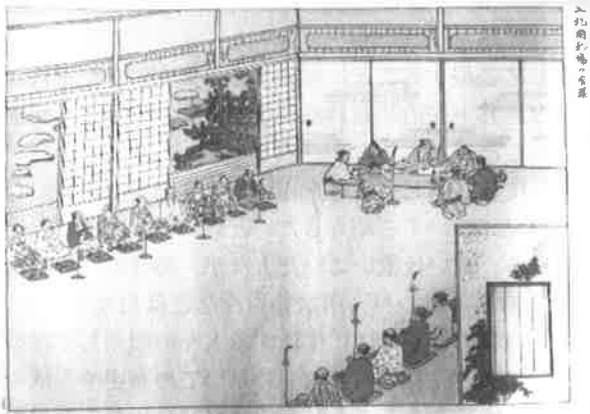
内容は、木場の景観、神社仏閣や名跡、生活や娯楽、仕事など多岐にわたっています。裏面ではその一部について絵と解説文を紹介します。

『木場名所図絵』以後

『木場名所図絵』と同様の記録に『木場角乗保存之絵』、『本所深川名所古跡』(石井赤太郎氏)、『木場乃面影』(中谷鍊太郎氏)などがあります。木場の川並で、現在は大洋筏株式会社代表の林栄次郎氏のお話によれば、例えば、石井赤太郎氏は木場の旦那衆で、『木場名所図絵』に触発された一人でした。石井氏は、早くから『木場名所図絵』のような絵を自分も描きたいと周囲に話していたようです。

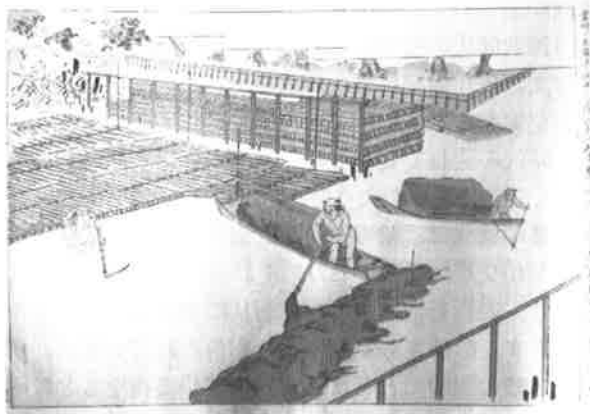
入札開札場

深川の富岡八幡宮には松本、伊勢屋と言う料亭があり、二軒茶屋と呼ばれていました。解説文によると、木場の入札は殆んど連夜、松本において行われていました。図中の帳場は入札問屋、両側には角屋が並んでいます。



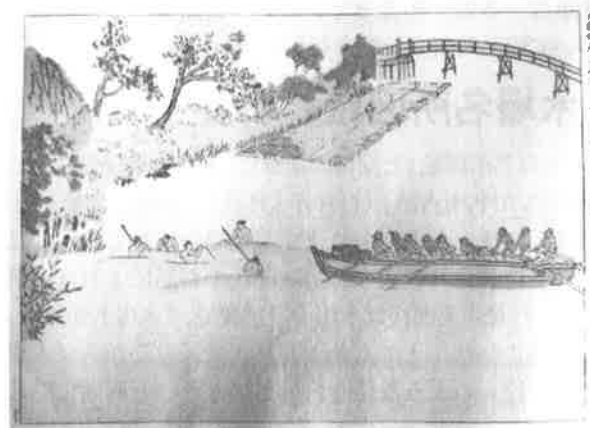
藻苅舟

木場の掘割には様々な藻が発生し、舟の通行に支障が出るため、毎年5、6月に藻苅舟が来てそれらを刈っていました。近年（昭和初年頃）は水質が変化したためか発生しなくなりました。



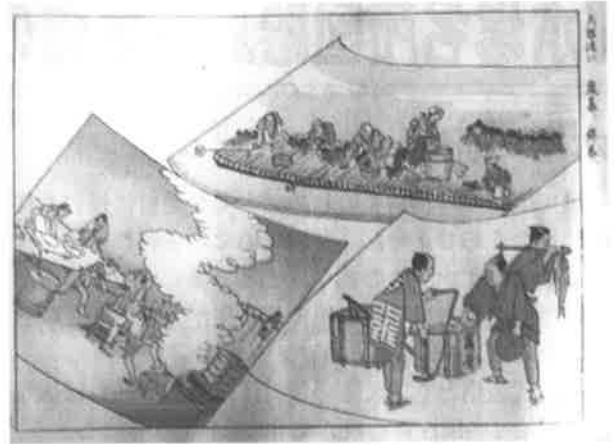
槻沈材引取り

造船の材料である槻という沈む材木を運ぶ様子です。特別に船頭衆を頼んで引きました。非常に、勇壮活発な光景だったようです。



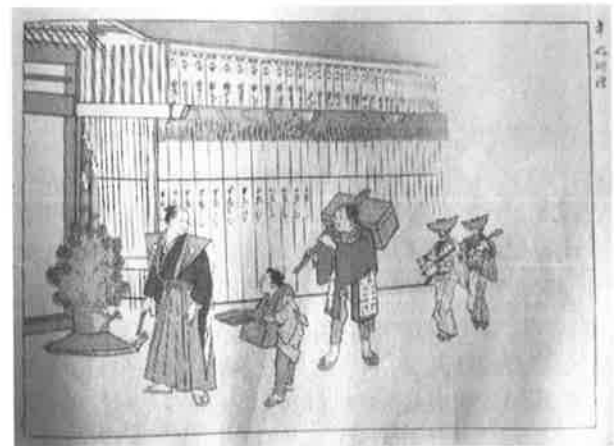
大根洗い、歳暮、餅搗

年末の木場の風景です。川堀の浮木の上で、男女交じって漬け込みの大根を洗う光景も、木場独特の情緒でした。



年始廻り

木場の年始廻りの光景です。小僧の持っているのは扇箱です。その後ろには鳥追いの姿が描かれています。材木問屋が正月には商売用の材木の並べ、注連縄を張り年始のお客様を迎えている様子です。



久次米ての字材木店

材木界の覇王と言われた、和倉町久次米ての字材木店の繁栄ぶりをあらわしています。

